

日本学術振興会 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）

中間評価（平成31（2019）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 京都大学エネルギー理工学研究所（教授・長崎 百伸）

研究交流課題名 磁場の多様性が拓く超高温プラズマダイナミクスと構造形成の国際研究拠点形成

評価結果（総合的評価）

- | | |
|-----|--|
| S | 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。 |
| ○ A | 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。 |
| B | ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。 |
| C | 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。 |

所見

本事業は、タスクフォースとして物理課題を明確にして、ネットワークを構築してきており、コロナ禍という直接的な交流ができない状況下においても、オンライン遠隔実験参加やオンライン会議などの工夫により、国際交流、国際共同研究を推進し、学術的価値の高い国際共著論文を発表している。ドイツとの研究成果が中心であり、ドイツ以外の国との共同研究の成果としての共著論文や学会発表等はまだまだ多くはなく、今後の努力が必要と思われるが、拠点機関以外の機関との国際交流へ拡大する取り組みは評価できる。

若手研究者育成においては、国際サマースクールの実施や、ITER機構の機構長に講演をしてもらうなど積極的な活動を行っている。実際に若手研究者・学生7名が11件の賞を授与されたことなどにもつながっており、高く評価される。

成果をあげたオンラインによる海外セミナーは2022年度以降も継続して行って欲しい一方で、コロナ禍による不可抗力によって制限された若手研究者育成と交流相手国との研究ネットワーク構築は、今後対面で行うことで更に推進することが期待される。本課題で掲げるプラズマダイナミクスと構造形成の総合的理解という目標に向け、より一層の国際交流と共同研究の実施により、高い成果を上げることを期待する。